



絵本女子盛侍

+

~ 13  
3581  
10





門 八 四  
號 3581  
卷 10



本孝感傳卷之十

目錄

刀歌ノ所在ト歌人注

環歌在田ト見出人圖

去城在都太小次郎ト試る圖

春城在都太小次郎ト試る注

目其二

春城復讐の清和ト和久注

小枝智氏破て清和ト列長注



早稲田 大學 圖書館  
35.1.22  
藏 書

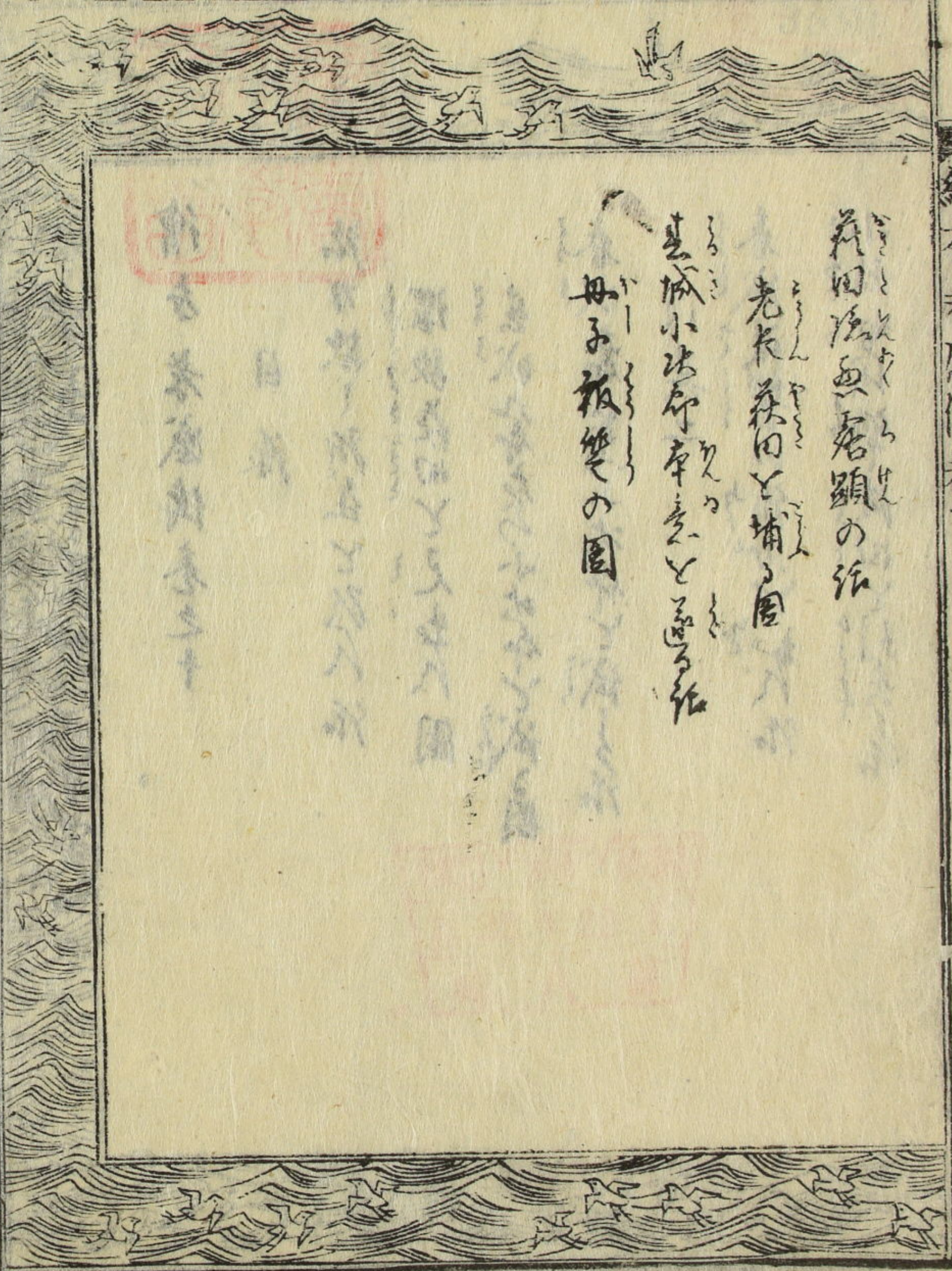


花田流無名頭の法

老長花田と埔の圖

春城小治命奉立と通る法

母子板雙の圖

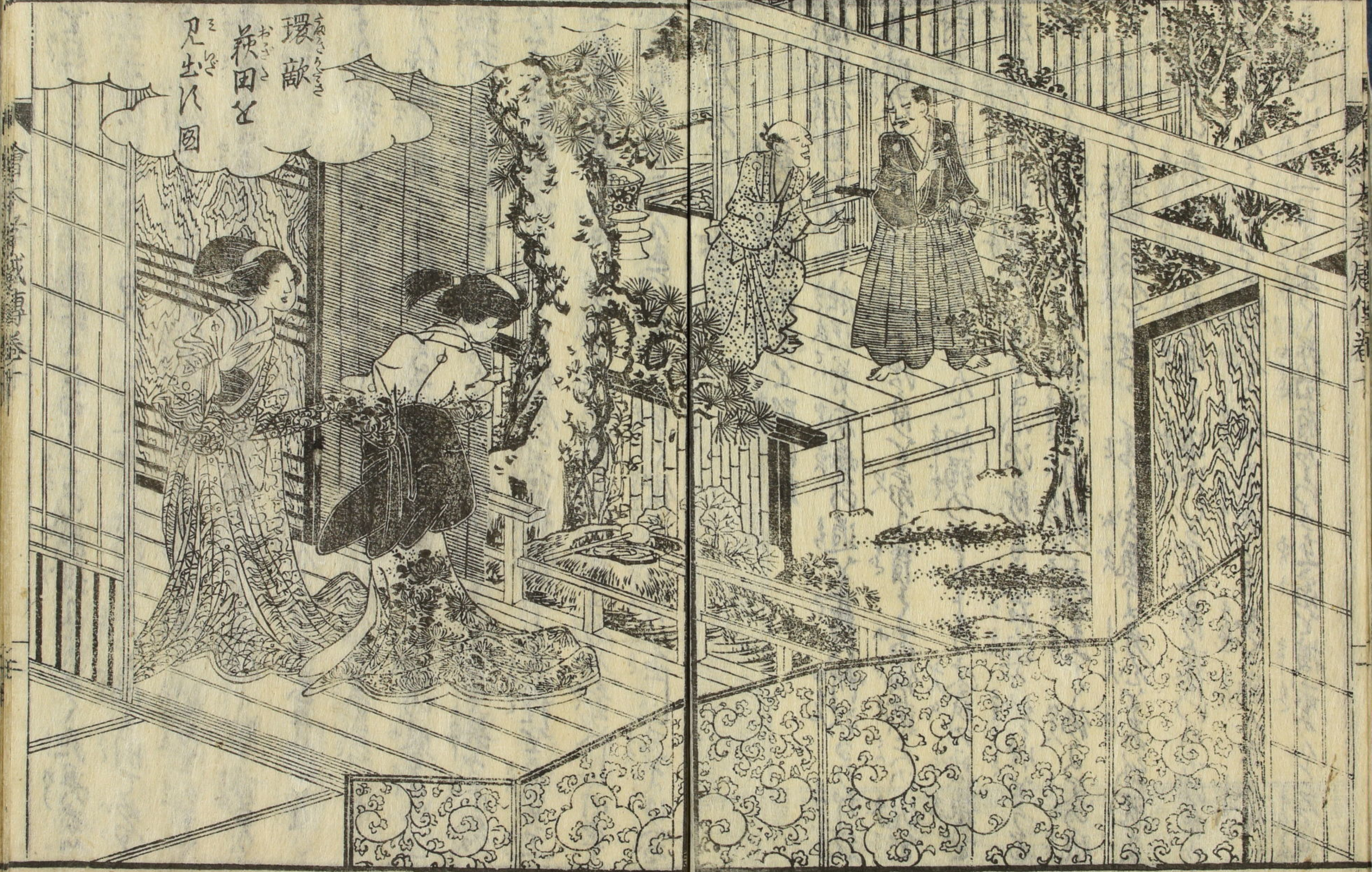


繪本孝威傳卷之十

後刀歌の不在と別以語

伯道初見と救急能見身友愛の道と盡以所叙り却説  
 春城九郎右衛門の姪小治命と家又育く不俱戴天の仇と  
 討せく再ひ家名を貞さんと初弱のそとより文武の技藝を  
 教習練の切と初はしつるより小治命も父右衛門が質性せうも  
 徳と才藝群と振く入母環が貞烈の志とまゝ海又父の仇  
 と報せんと鐵腸石心と彫りし殊よ武藝より父公と若孫郎又  
 拾五歳の春精熟日を過く進んじふ九郎右衛門の小治命が  
 成長と目々く公大よ懐び合ひ却り出遇とも志と遂ん幸子細わ  
 らししけよ一日も早く疾田有左のふを急を捜求めんとし通





環敵  
萩田  
見出以因

結老老履傳者

繪本老老履傳者







之と依當し翌日及んで私の幸ありと稱して環と誘ひ  
 婢女奴僕ある人をして従うて懐かすは座の神祠を訪ふ  
 内海津屋が宿せる湖は是れなり遙く其動靜を日々伺ふ  
 戸邊に鎗狭箱を重敷供等が徘徊する状あり妻女も亦  
 一人の奴僕と縁が家より去る世物語の内海津不圖も是を憫  
 難儀及んで人連の智をばふる間際、体足と求るよしを言せ  
 々さかた平纏く出逢ふ一の別身人請じ今日お悪妻大長  
 守より賓客あり座敷の裏をひひぬ見若しくは人ど  
 けよて骨を体ひりる道しと兼菓及び杯を携へむを  
 餐は春味が毒の園因ふまはは方よて公相せは給也し  
 窓の夜の種くとまきくうとと逃げたはし婢女は約を取せて  
 故と附と移し環と私籠く物の障より那程の聲を伺ひ  
 見るよ酒宴ありとぞとぞと談笑の音を聞きて極端の  
 隙子と聞えり其平先より賓客を便而も誘ふは城の  
 妻環が袖を引く形と告げ環は何の目も一別以来教養  
 控て容貌稍なまりとの人も見遠く居るも何れは甲く居る  
 疾回有たあつるりしうぶ恨の情より胸を貫きさるる計  
 議ともなまきくまはは腹を腹と取也し直中を躍せんとせし  
 嫂く早くも其機を見くは引留め煙の煙は幸を言ふま  
 へ推るがうははあの人を見せしと云はれたるが計は  
 教も何れし由るさあはは強ちと強ちと云はれしうぶ  
 環も吃とん付く煙情と制しぬ危角する内連の智も亦

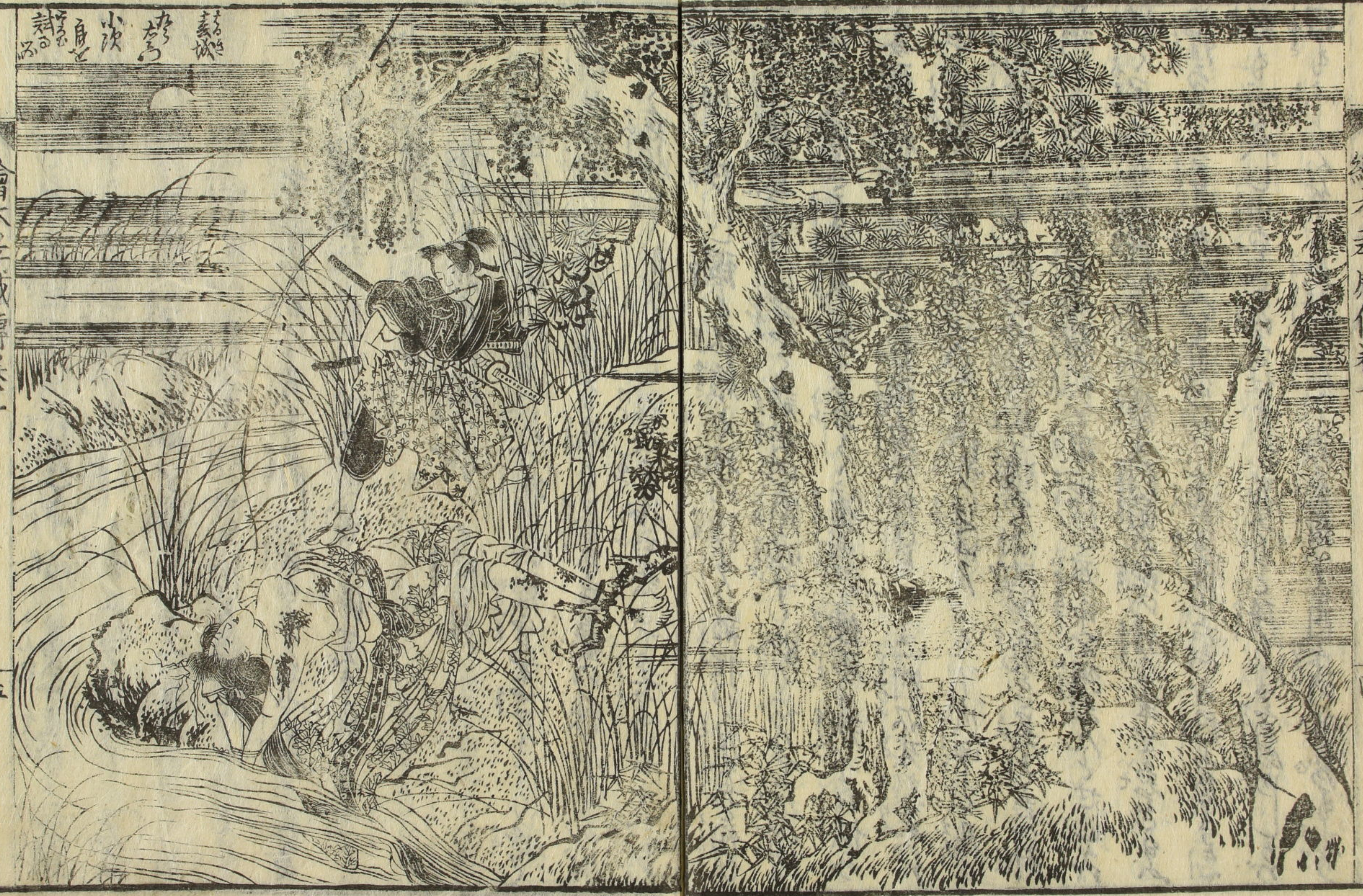
曾下持感傳卷十

日



新編 小次郎 嘉城

繪本 武藏傳 卷一



繪本 武藏傳 卷一

四



しういふとありて、萩田が今の姓名を傳へし、其年支那の礼謝  
 と述ぶ家も有りて、その礼謝詳し告せし、ふたつたのたふ  
 娘ひ萩田有左衛門の亡弟の指料を取持するうへ、鎌倉の右  
 近が、萩田の渠が、西のよき交せり、奴己は、大長者の最上と  
 先と、萩田の年輩を、及ぶよりも、易し、去るが、る子細あり、  
 某が、口を、開の、村の、まゝ、小治、萩田へ、喚く、漏す、  
 示し、合せ、と、止、よ、る。

春城九島右衛門小次郎と試る詔

且、説、右、近、が、遺、孤、小、次、郎、の、父、が、横、死、の、使、定、と、  
 後、継、志、を、立、寢、食、を、も、忘、  
 夫、も、考、ま、ま、も、伯、父、九、島、右、衛、門、の、  
 足、し、  
 後、又、  
 傍、の、渠、が、精、神、の、  
 唯、  
 妻、の、幸、  
 女、の、死、  
 能、  
 似、  
 の、一、  
 光、

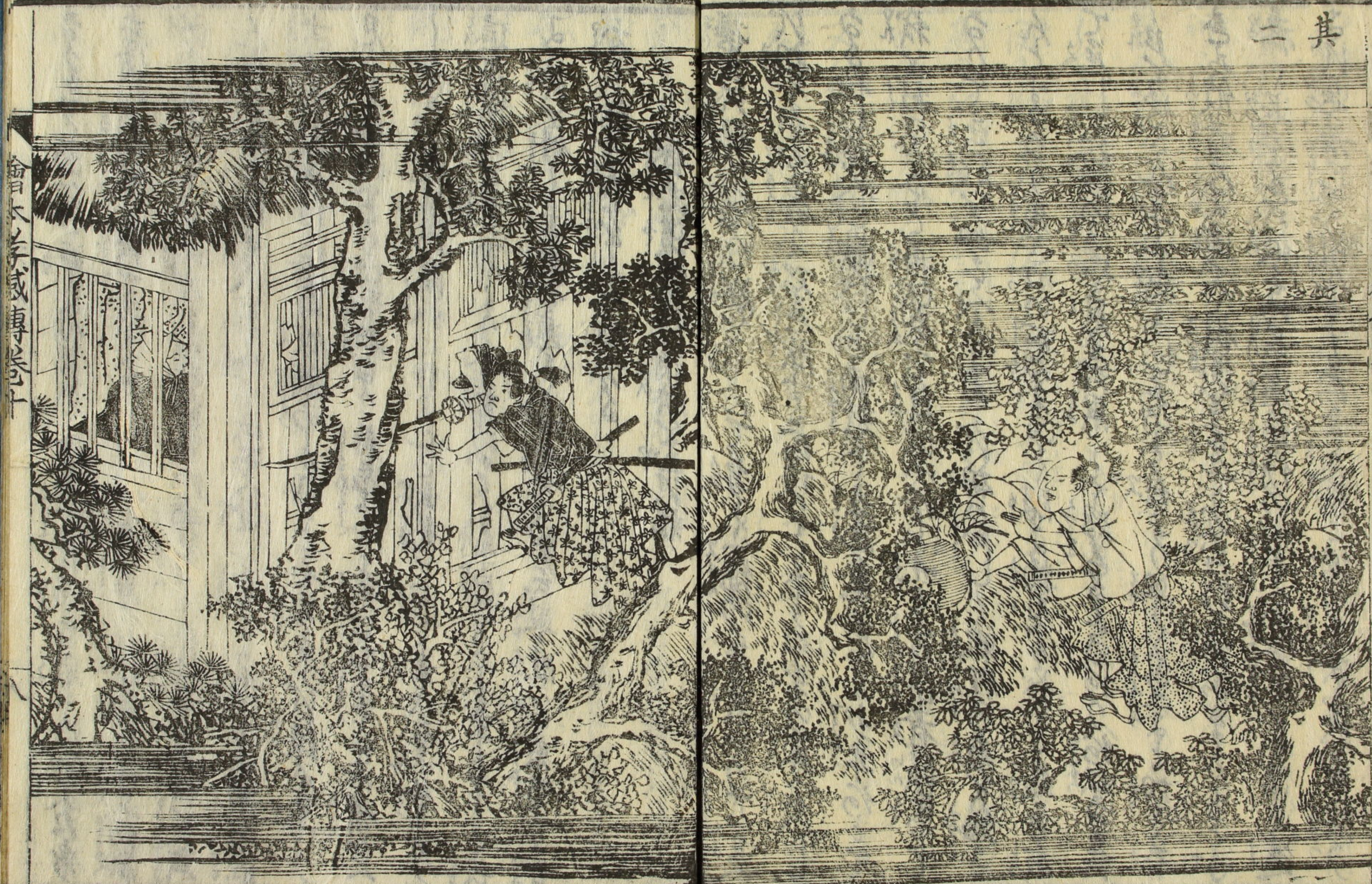
且、説、右、近、が、遺、孤、小、次、郎、の、父、が、横、死、の、使、定、と、  
 後、継、志、を、立、寢、食、を、も、忘、  
 夫、も、考、ま、ま、も、伯、父、九、島、右、衛、門、の、  
 足、し、  
 後、又、  
 傍、の、渠、が、精、神、の、  
 唯、  
 妻、の、幸、  
 女、の、死、  
 能、  
 似、  
 の、一、  
 光、



三冬の薄雪を敷く其光を素懐懐くて自人の毛孔を露の  
 小治る固氣が氣を新しうぶかも懐かに息を修む彼の所へ  
 到るは月影を今く山の場は落跡は喬木蔚然と有りて  
 困りたるは物の形色も分は是よおわくを神と収め眼精を漸  
 して林中を伺ひ見るよ兼よも伯父の祠は遠び入の死骸樹  
 間へ倒るるは刃るより五端其例は多き面を擗くよはあ  
 庭子を引取二三之足は去る勿れを致し少半を救  
 と唯小治る吃とせ始めく這者假死しく未息の絶るもの  
 又ハ狐狸の影ひを侮りて感にその有りはもせよ打捨を  
 森会の至るよは竹りとよび之を分り先を子にを擗す  
 ぬよ願冷水を磨するがどくよく微の脈も應せず試し面を

擗すハ眼を張り眼を閉して若く一縷の糸息有りた  
 ハ柳の影を素よは是を懐する所ありてあはぬ事の耳又入し  
 るよハ柳ハ懐し懐しと懐すく急急を懐けよ少半何とて  
 我を救へると再びおを救ひ小治る吃と分付者陰鬼也  
 るりて云款を吐きよはあは柳ハ正しく狐狸の毒を懸  
 んとするるり毒は奴の毒もあつて眼は物見まよと遠り取  
 て危し死骸の後を見ま果しく踏むるその有り何故るよハ  
 毒を後さんとする免はじそのと云より早くよは切くを  
 毒は彼者大は遠く樹間を穿て迹出は何れもあつて  
 痛く追をまは彼その是遠修傍の小串へ迹を而し小治る透  
 さい追活は斬んとするあは息絶と燭の光映出影影





會天孝感傳卷下

孝感傳卷下

廿



るりきと箇むるやうな何そのもと成る何を討らん伯父の身  
 在清の竊姓を携て後より小治原の邊にたどりぬけぬけとて  
 珍なり移り居ると同く是れ九郎右衛門の微笑とて赤母が面  
 人召家僕三回奉八と申すは西人遣し奉りか儀も大膽の仕  
 士女も氣成りき自然誤あらんうとを安うて後々あり  
 凡しよ業のどくけ形状より若菜奉り奉り奉り奉り奉り  
 一幸八の夜基の陰奴と云ふと云是を聞て奉八も小治原  
 這出僕物と云へし今宵のどく奉目と云へ奉り奉り奉り  
 又二笑を催し主従才連とて番舞はゆき早腕雲東奇なり  
 交り給時をよとて侍人なる

春珠後襲の請状と出に話

形く其夜もぬく九郎右衛門環小治原と嘗て又培とて系  
 奉末汝が亡父の仇と捜り不俱戴天の恨を晴らしめんを  
 尋せしや又附るるか其仇人萩田有右衛門こそ姓名を更めて  
 淡田文藏と名乗るは今蒙家の支族大長者の場なりは係  
 御と曰りして介助又伺ひ知りぬ初推のそより武術より  
 御法の進退畧精鍊なるといふ未奉四と積むる奉り又降  
 で包氣の動搖せん奉り奉り奉り奉り奉り奉り奉り奉り奉り  
 然の練熟大款又降んで精展せざる勇士なり今附目と云  
 され奉り又請く本意と達せしめんとは請状と謂ふなりゆ  
 奉り又降ひ奉り奉り奉り奉り奉り奉り奉り奉り奉り奉り  
 清公と云ふは上敵萩田が女房なりは分るるは渠と云ふ



孟賁の勇有りとも天理の誠と頭と戴きて渠が首を擡落  
 さん奉承を喜ぶ事又後有り少も所獲魚の如くはと躍り  
 上つては必骨節勇奪は目より十倍も天晴勇くくこと  
 奉りたりた右勇のけ狀と見ると大は収ひ相修へく尚家社  
 櫻の老臣小枝依後守が敏は候し徹は春城九所有清の預  
 表有りて系渴せし類と述べ認め持する精狀と出し且は後守  
 収く是ざるを補ひ是後詳くは述べ後継を収ひくは依後守  
 是又同と早りとく好寄ざる類の次第奉承をそとく求  
 悔のまじりたる事もあるはじく且小治の母子の志  
 感稱するは博くまじり速く又若くは達し許容の念を告ぐは  
 否と云ふるまじり文法と云ふが、彼方も一様是の事あるまじり

汗涸の應拂及及び類し依後守は合子細も物まじり追く方右  
 及及びまじり他同と俾るべし決り悪類の計ありまじりといえおの  
 類は強く形なりあるも豊りとく是と後の方右とを俾るなり  
 小枝智と仰く法同と云ふは  
 且款小枝依後守の書目は宗室南麻三左衛門の密な合を  
 傳へ聞者も仰く法同文藏が中本名を改れせしは先ず其  
 謀が告ぐをせし是又周く再び二右衛門の謀と示意今吾廣依  
 の刀御用有之間而持のそのいふ及及び依後守より吾輩の罪  
 多りとも小枝依後守が難人持するなるとも依後守の觸流をね  
 流る廣文の封固するは不目と指出るそのふ六箇及及び其申  
 二番及及び奉りも彼後回が所持の刀と指出るは依後守自



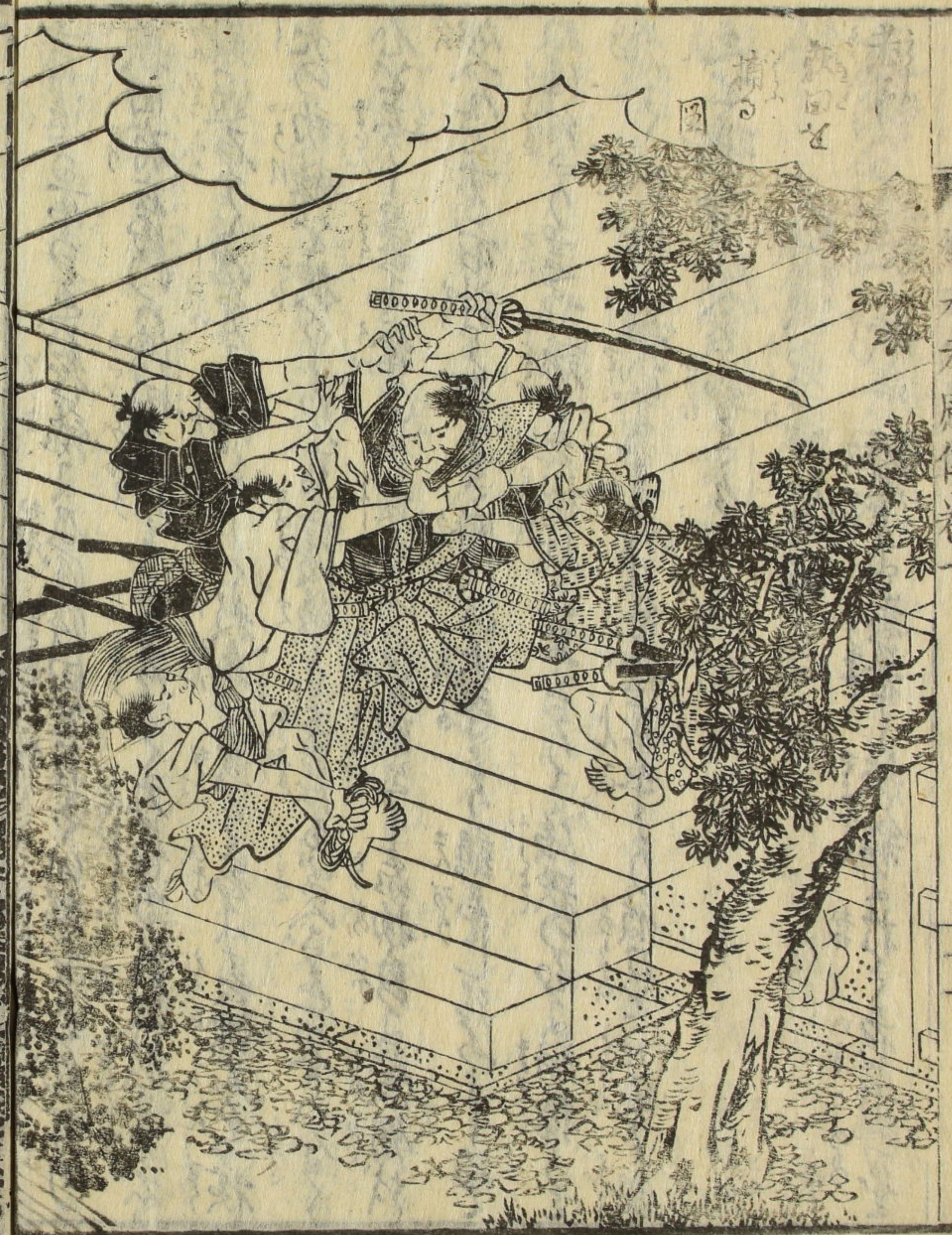
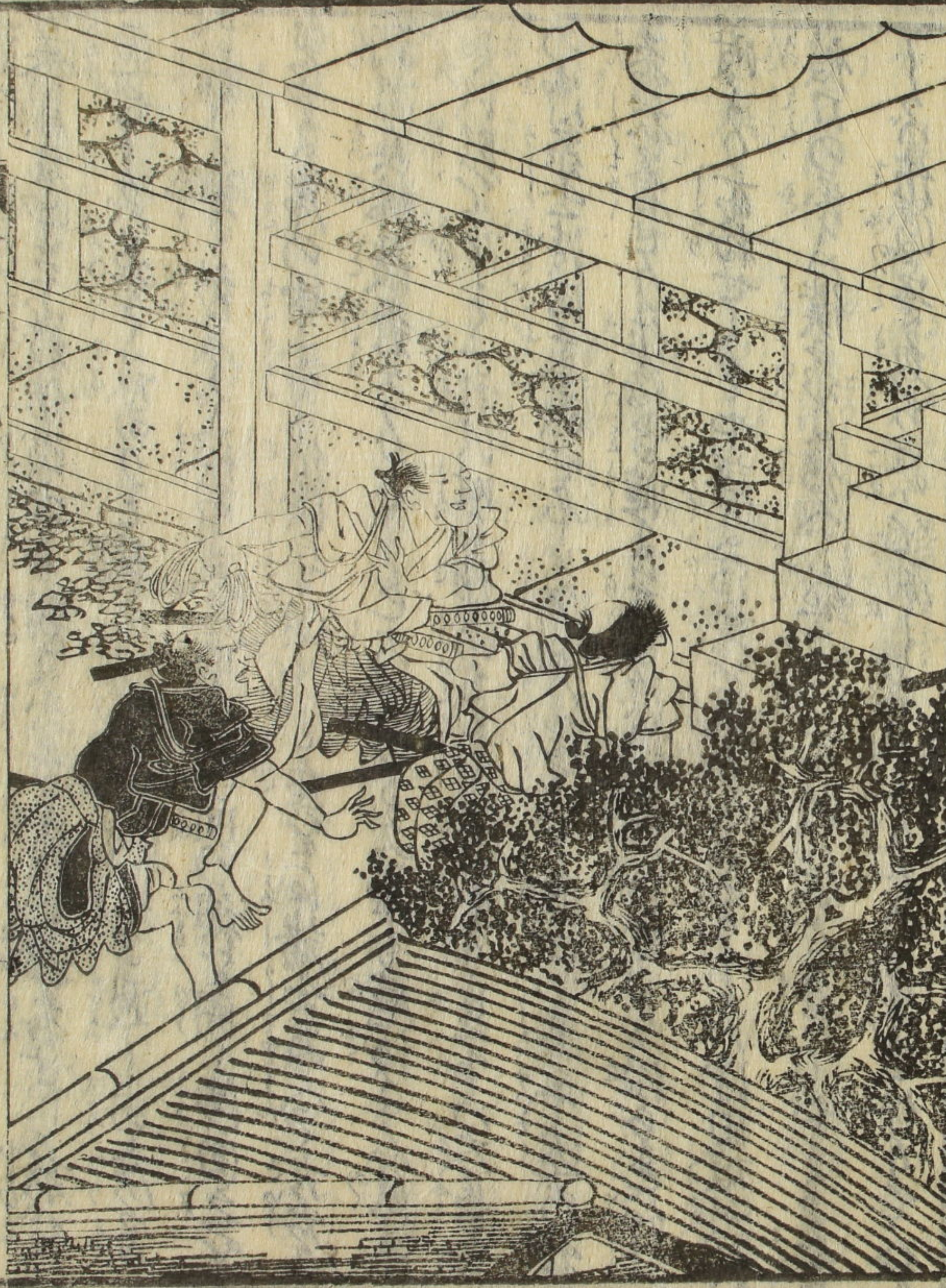
其平と叫出よびだしは方太守あたりの吉原よしのの刀所やぶ懸るかかるるより必内かならずり  
 命いのちもく取集とりのあるるあは其方そのまう出立いだしるるの取最とりの名刀ななりて沖  
 好この又また存ぞうりこれ遠とほいゆるが所持しよするるあり又また外あより影かげさるるもの無な状じやう  
 と昔むかしすしと為同な其平そのへい敢あて強つさば大長おほなが寺てらの家士いえし清田きよた之の懸  
 が重かさ代しろるるよりあの白しろ又また言こと人ひと依よ原はら守まもり同どう和わく其平そのへいよりお替かわ  
 らざるもの口状くちじやうと取り其後そののち大長おほなが寺てらの老らう臣しん中ちゆうへ孔くわ孔くわと贈くりく  
 の沈しづめめよりよりあるる吉原よしのの刀やぶ敷し多たに奇き肉にく見みええ及びおよびるるるああそそ此  
 備び士し清田きよた之の懸か持もちりるる取最とりの名刀ななりて太守あたりの懸かるるの回まわり  
 出いででるるああはああくくいいけけくくるる取最とりのの刀やぶをを懸かるる或あるは代しろ金かねををととり  
 僕わらう謝禮しやれい備びえ其方そのまうの事ことはは何なにももとと回まわ早はや速すみ贈くりく換かりり  
 有ありりとと系けい傳でんするる申まを通とせせるるああは後のち中ちゆうももああののええををととり

送おくるるああるるままはは行ゆ録ろく又また及およびる清田きよたとと取とりりけけ報ほうをを及およびるせせり  
 萩田はぎた有ありり在あるるのの清田きよた之の系けいとと及およびる大長おほなが寺てらはは仕し人ひと城しろ守まもり  
 員いん過かるる治ち平へい又また界かいををととりり教けう事じをを送おくりり密ひそにに去き疎そちちをを換かりり  
 死しの動どう靜じやうとと換かりりととのの其その後のち後のちとと高たか松まつももああるるままはは今いまのの今いまとと  
 心こころとと安やすくく思おもひひとと吉原よしのの刀やぶとと取とりり取とりり物もの自みづかららはは装ま飾かりり  
 加かへへんととするる前まへ計けいととりりとと勝かつ決けつのの太守あたりのより懸かるる懸かるるしし強つくくるる受  
 ぬぬ付つけりり遠とほやや遠とほはは六む禍わざはひ此こゝ三さん年ねんよりりとと強つくくるる受うけけるる受  
 方かたとと其その後のちのの思おもひひもも及およびる皆みな懸かるる其平そのへいより被かりり刀やぶとと取とりり取  
 之これをを携たづねね人ひとをを取とりりるる

其田原要露歌の報

再また叙しよ清田きよた之の取とりり勝かつ澤さわはは者もの者もの後のち報ほうはは於おここるる衣い履りふ佩はい刀たうと







美麗は出立の儀に依りて守が館に出立の儀に依りて  
 通せしむるに依りて守が館に出立の儀に依りて  
 一節に於ては守が館に出立の儀に依りて  
 見るに依りて守が館に出立の儀に依りて  
 列に依りて守が館に出立の儀に依りて  
 思に依りて守が館に出立の儀に依りて  
 の清室に依りて守が館に出立の儀に依りて  
 悉に依りて守が館に出立の儀に依りて  
 時より依りて守が館に出立の儀に依りて  
 彼刀の依りて守が館に出立の儀に依りて  
 一に依りて守が館に出立の儀に依りて

勤く幸やゆる彼刀の依りて守が館に出立の儀に依りて  
 有右衛門と言ひて守が館に出立の儀に依りて  
 某疾より之を依りて守が館に出立の儀に依りて  
 等と免をよと依りて守が館に出立の儀に依りて  
 と刺るが依りて守が館に出立の儀に依りて  
 形を渠が罪に依りて守が館に出立の儀に依りて  
 諸士名務と依りて守が館に出立の儀に依りて  
 りりと身と依りて守が館に出立の儀に依りて  
 又切てをると依りて守が館に出立の儀に依りて  
 大せび依りて守が館に出立の儀に依りて  
 一聞は禁固に依りて守が館に出立の儀に依りて



おおく春城右近と春城左近と争ひし刀を奪ひし始末合めりし事  
 身を分て大守の懸又違し春城九郎右衛門日向小次郎母  
 が預の報と披露ある大守佐治もが討ひの精密たるを稱  
 稱ひは料の較計知く佐治守は但し後以後田を罪一等と  
 春城小次郎へ雙討の勝負を許さるる

春城小次郎本多を誣る話

新く小枝佐治守は君命と違りし先春城九郎右衛門及び  
 治部母子を喰く後仇の勝負許官の命を告後し又大老  
 使者と日向所家土浅田文藏故名萩田有右衛門を先  
 内堀威谷におおく春城左近と争ひし者を害し利へ所  
 と大集ひえりる衆は是れ乳問のう科刑は事すべし

次郎義環云餘義預より後雙の勝負や付る事

間其館よりも見及びの士少見出し何んじと告送りなれ  
 が城より大は警と後以衆衆も知る方々の何りし事  
 老練の佐治守は欺きく左なる家士を後せしこそ  
 ら称去るが形も云の者とも知らぬ抱入し謬る家  
 よりの告免角の理論は及びごとと事家士を勝はり  
 遣りたる勝は城外より方に拾間の竹馬を結ぶ方  
 と知く一方は小枝佐治守一方は大長寺の家士列を  
 て座とる既又時刻はありし環小次郎佐治守はおおく  
 武徳のどく徳義の品を賜り小治くは白雲堀は緋緋  
 必く身と圍り是の二腰を帯し先は進む





母子  
報讐の図





中へ入らば後々環も月どおとすは法英縮纏の務録巻一長  
 刀掃く後又後ひ母子たなま年束の替横と晴さん時初なり  
 と喜色面よ形も一有極早勝色を刀母せく最花よりくそ  
 月人ぬけ時登家官角廉三左衛門秋田有右衛門と守護  
 本つる馬の中より引居相國の右衛門と守護をせむ小治と母子  
 立上つる何又秋田有右衛門湯が娘たのみ又罹一春城た  
 進が二子日苗小治身妻環又の焼吏の仇為帝の勝負せよ  
 と名乗一久秋田二豆のどくきささうり眼とらうつと惚  
 一武術の園へ入る右衛門すももるく斃せ一果又腕も  
 ぬ女母子の分際よく徳討をせんと事一こそ分けるま事よ  
 相せ右をとなは又智士の奴とるゆせんとな刀と振被一

小次郎と目切切てくる小次郎はなりと接合せ請う掛河  
 身は秘術を語り一良時移るまもと挑まうが小治と流る小  
 腕るまが少しもるんで見くまは環長刀と氷車のごとく掃り  
 系作とあつをく透もやせば切くかる秋田公はぬとなは  
 あつりたなま商り挑合休孝子貞婦のまは術強悪云双忠練  
 術と刀より火とちり一砂烟天と雲は教をを出一く強ひ  
 一いつ果ぶら刀入るぬ貝分の諸士刀は物の群聚もは汗  
 と極り身を落くそ見居りくるるるるるるの秋田環はすふ  
 長刀と歩掛ひ一討と付入る何のや環一あまもあまも  
 比と危く見入る一更小治と後より死ううく父の仇をす  
 と秋田が肩先を守計切付まはまの尽るあまや強き子の秋



因も博り申比喝と叫んであらう隙環ゆるりと長刀逆取  
 車一腰のつがひを羅対しふあちをぬくころあづき鹿角は  
 鳴と倒すと記もまはひぬきとくあち切敷く年来の替換  
 足下と服の双指通し葉糸と笑あちくるるしん公地より  
 歌はるり見分の諸士あんとあちを立仕りやくと鼓称の  
 ありとくるりも止ざりくる秋く後射首尾よく幸終り  
 久の佐後守及び大長あちの諸士をよめ國の有司列を正  
 しく敏はゆり幸の法をよめ正に徳中春博たちあちが  
 大かろるび母子と養應く只は喜ひを表して大守の後系  
 と侍るるよ救日の後小治所を敏は正出さる弱幸なり  
 父の仇を報せし切とさうく美せし是新知二百石を初り  
 て巨抱へと進遂り公のごとく家名を起し一家赫々  
 と栄えたる是偏は環が貞操小次所が孝勇天地神の  
 冥助とゆき形著るるは忠應と来はあちりおまをさして  
 動り事とあちぬ

東林書林

大正五年六月

繪本孝威傳卷之十六尾









復讐言石見英雄録 初編 七冊

繪本誠忠傳 十冊

同 二編 七冊

同 合邦辻 十冊

同 三編 七冊

同 芦芽草紙 十冊

復讐言石見英雄録 第四輯 七冊

同 淺草靈驗記 十冊

同 同 同 同 同

同 同忠孝美善録 十冊

同 同 同 同 同

同 同 同 同 同

同 同 同 同 同

同 同 同 同 同

祐天一人代記圖會 六冊

同 同 同 同 同

同 同 同 同 同

同 同 同 同 同

新累解脫物語 五冊

小栗外傳 十冊

同 同 同 同 同

繪本忠臣藏 十冊

同 同 同 同 同

同 同 同 同 同

同 同 同 同 同

同 同 同 同 同

朝比奈巡嶋記 卅冊

同 同 同 同 同

同 同 同 同 同

同 同 同 同 同

同 同 同 同 同

同 同 同 同 同

同 同 同 同 同

同 同 同 同 同



松深 曲亭主人述作  
情史 七種 六冊

河原久松の近世世帯を古(蘭)朝の末の侍道の人時(おのゝと)と鬼(おに)と勇士の節(ふし)とより後(ご)盗(ぬす)除(ぬ)け古(ふる)主(ぬし)の與(とも)に養(やしな)へ死(し)せんと云(い)ふ

石言遺響 同前  
蹄齋北馬画 五冊

遠江の國(くに)心(こゝろ)夜(よ)の沖(なみ)山(やま)多(おほ)夜(よ)泣(な)石(いし)種(たね)と一(ひと)り  
菊(きく)川(がわ)の里(さと)の奇(き)許(もと)る人(ひと)と良(よ)き花(はな)を(を)りて(を)りて(を)りて(を)りて)小(こ)説(せつ)

月冰奇縁 同前  
梅(うめ)春(はる)里(さと)谷(や)岐(ぎ)作(さく)

金花々映 北馬  
五冊

孝子嫩物語 蘭山作  
五冊

繪本二夜船譚 櫻(おう)春(はる)曉(あけ)齋(さい)作(さく)

繪本那智白糸 蘭(らん)山(さん)著(しやく) 北(きた)馬(ば)画(ゑ) 六(む)冊(ぱん)

同魁草紙 平(へい)野(の)齋(さい)馬(ば)作(さく) 五(ご)冊(ぱん)

同奈古曾の淵 或(ある)和(わ)亭(てい)齋(さい)馬(ば)作(さく) 蹄(てい)齋(さい)北(きた)馬(ば)画(ゑ) 五(ご)冊(ぱん)

同平泉實記 蓮(れん)水(すい)春(はる)曉(あけ)齋(さい)作(さく) 蹄(てい)齋(さい)北(きた)馬(ば)画(ゑ) 三(さん)冊(ぱん)

同自來也説話 或(ある)和(わ)亭(てい)齋(さい)馬(ば)作(さく) 蹄(てい)齋(さい)北(きた)馬(ば)画(ゑ) 十(じゅう)冊(ぱん)

同口之碑 櫻(おう)春(はる)曉(あけ)齋(さい)馬(ば)作(さく) 蹄(てい)齋(さい)北(きた)馬(ば)画(ゑ) 五(ご)冊(ぱん)

風流俄天狗 前(まへ)編(へん) 十(じゅう)冊(ぱん)

紙治椿生談 東(とう)齋(さい)作(さく) 蹄(てい)齋(さい)北(きた)馬(ば)画(ゑ) 五(ご)冊(ぱん)

復讐言東物語 櫻(おう)春(はる)曉(あけ)齋(さい)馬(ば)作(さく) 蹄(てい)齋(さい)北(きた)馬(ば)画(ゑ) 六(む)冊(ぱん)

同安達ヶ原 白(はく)日(にち)齋(さい)馬(ば)作(さく) 蹄(てい)齋(さい)北(きた)馬(ば)画(ゑ) 六(む)冊(ぱん)

再開高臺梅 櫻(おう)春(はる)曉(あけ)齋(さい)馬(ば)作(さく) 蹄(てい)齋(さい)北(きた)馬(ば)画(ゑ) 六(む)冊(ぱん)

繪本白壁草紙 東(とう)齋(さい)馬(ば)作(さく) 蹄(てい)齋(さい)北(きた)馬(ば)画(ゑ) 六(む)冊(ぱん)

見外高平當利 十(じゅう)通(つう)會(かい)三(さん)九(く)夜(や) 五(ご)冊(ぱん)

通俗巫山夢 春(はる)の(の)屋(や)主(ぬし)齋(さい)馬(ば)作(さく) 蹄(てい)齋(さい)北(きた)馬(ば)画(ゑ) 五(ご)冊(ぱん)

貧福太平記 保(たも)之(の)齋(さい)馬(ば)作(さく) 蹄(てい)齋(さい)北(きた)馬(ば)画(ゑ) 二(に)冊(ぱん)

復讐言初瀬物語 櫻(おう)春(はる)曉(あけ)齋(さい)馬(ば)作(さく) 蹄(てい)齋(さい)北(きた)馬(ば)画(ゑ) 七(しち)冊(ぱん)  
新田(あらた)足(あし)利(り)外(がわ)名(な)格(がく)の(の)洋(やう)論(ろん)聖(せい)八(はち)希(き)の(の)洋(やう)論(ろん)  
新(あらた)田(た)足(あし)利(り)外(がわ)名(な)格(がく)の(の)洋(やう)論(ろん)聖(せい)八(はち)希(き)の(の)洋(やう)論(ろん)  
新(あらた)田(た)足(あし)利(り)外(がわ)名(な)格(がく)の(の)洋(やう)論(ろん)聖(せい)八(はち)希(き)の(の)洋(やう)論(ろん)

繪本白壁草紙 東(とう)齋(さい)馬(ば)作(さく) 蹄(てい)齋(さい)北(きた)馬(ば)画(ゑ) 六(む)冊(ぱん)  
見外高平當利 十(じゅう)通(つう)會(かい)三(さん)九(く)夜(や) 五(ご)冊(ぱん)  
通俗巫山夢 春(はる)の(の)屋(や)主(ぬし)齋(さい)馬(ば)作(さく) 蹄(てい)齋(さい)北(きた)馬(ば)画(ゑ) 五(ご)冊(ぱん)  
貧福太平記 保(たも)之(の)齋(さい)馬(ば)作(さく) 蹄(てい)齋(さい)北(きた)馬(ば)画(ゑ) 二(に)冊(ぱん)



教訓部都言種

前編 全四冊

百家崎行傳

五冊

教訓部都言種 前編 全四冊 農工商と階級と論は近代の... 感傷の怪... 四十有九人の事... 信河崎編年... 實録の... 櫻史の...

雨月物語

五冊

續 續 續 續 續

二冊

桂林漫錄

桂川幸長先生著

二冊

美作孝民傳

十冊

好古博識和漢の雜史... 大正... 方面...

合戰評判

昭代著聞集

古戰評判

太平記

片假名

廿一冊

續古戰得失論

續太平記

# 書籍賣弘處

文部省御藏版翻刻書類學校用諸書圖類地球儀并詩作文類總て方今要用書類、格別、下直ニ奉差上候間多少ニ不限所用向所付板降度奉願候

源

前川源七郎

本屋下... 天寶寺... 八景...



